

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



HOME > 埼玉県武州和牛組合 強力なリーダーシップと地域仲間の信頼で作上げた埼玉ブランド「武州和牛」

## 埼玉県武州和牛組合（埼玉県）

### 強力なリーダーシップと地域仲間の信頼で作上げた埼玉ブランド「武州和牛」

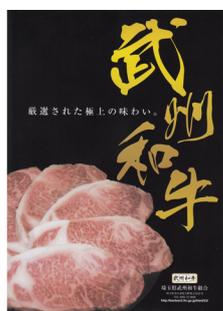
カテゴリ 取り組み主体区分：組織・グループ活動 運営・経営形態：任意組織・協議会等 畜種（畜産経営の場合）：肉用牛肥育

タグ | 地域畜産の存続を支える担い手対策 | 消費者等への理解醸成 | ネットワーク・絆



女性部の消費拡大活動

BSEの発生、その後の子牛価格や牛肉価格が大暴落し経営が危機に陥る中、肉用牛経営の安定と将来性を考え、埼玉県産ブランド牛肉「武州和牛」の歩みが始まる。代表の塚田正行氏が中心となり、強力なリーダーシップと豊かな経験と知識、そして何よりも地域の仲間から絶大な信頼を得て、ブランド化に取り組んだ。活動当初、組合員は乳雄肥育・交雑種・和牛とさまざまであり、飼養管理上の共通項目も少なかった。ブランドとしてゼロの状態から「形あるもの」に築き上げ、和牛で統一、地域に根付き、さらに東京食肉市場への上場も果たすブランドに成長した。トウモロコシや麦などをブレンドした武州和牛オリジナルの配合飼料を共通して使用し、さらに各組合員が独自の工夫をプラスして肉質の向上に努めている。現在、組合員農家は20戸、合計飼育頭数は黒毛和牛約7,000頭で、年間出荷頭数は約2,500頭。それぞれの生産者の考えをまとめあげ、和牛統一飼養をけん引したリーダーシップ。その下でみんなが1つにまとまった「ゼロ」からの「造形」は注目すべきである。



ポスター



パンフレット



(図) 組合員数の推移



組合員の牧場



販売促進アイテム

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



HOME > ひょうご雪姫ポークブランド推進協議会 牛肉文化の関西で新ブランド豚肉“ひょうご雪姫ポーク”の確立を目指す

## ひょうご雪姫ポークブランド推進協議会（兵庫県）

### 牛肉文化の関西で新ブランド豚肉“ひょうご雪姫ポーク”の確立を目指す

カテゴリ 取り組み主体区分：組織・グループ活動 運営・経営形態：任意組織・協議会等 畜種（畜産経営の場合）：養豚  
 タグ | 地域資源の有効活用 | 消費者等への理解醸成 |

#### ひょうご雪姫ポークブランド推進協議会 生産者



キムラ商店（木村友彦）



定岡畜産（定岡 太）



協和飼糧(株)上月ファーム



有限会社 高尾牧場

ひょうご雪姫ポークブランド推進協議会生産者

養豚生産農家4戸、流通・卸業者、飼料製造者と県および兵庫県畜産協会が協力し、兵庫県の新しいブランド豚肉「ひょうご雪姫ポーク」の生産振興を図っている。この豚肉には高たんぱく質飼料（小麦由来のエコフィード）の給与によりロース肉中に通常の約3倍の脂肪（サシ）が入るのが大きな特徴。さらに、一般の豚肉に比べて脂肪の融点が約3℃低く、オレイン酸が多く含まれるなど、食味に優れた、おいしい豚肉である。関西では牛肉が食文化の主流にあり豚肉の消費拡大は容易ではないが、市場に新たなニーズを創出し、神戸ビーフのような強いブランド力を目指している。ブランド化にあたり、①消費者へのPR活動、②流通業者、飲食店等への販路拡大活動、③一般公募による名称募集、商標登録などの活動、④協議会設立による協力体制の構築などを実施。生産者と関係者が一体となって、地道な地域ブランドの創出により畜産物の生産振興を実施している。



ひょうご雪姫ポーク ロゴマーク

#### 「ひょうご雪姫ポーク」とは？



「ひょうご雪姫ポーク」の特徴

#### ひょうご雪姫ポークブランド推進協議会 生産者



キムラ商店（木村友彦）



定岡畜産（定岡 太）



協和飼糧(株)上月ファーム



有限会社 高尾牧場

ひょうご雪姫ポークブランド推進協議会生産者



2012年食肉産業会（東京ビッグサイト）に出展



スライスした雪姫ポーク

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [有明堆肥利用組合](#) 堆肥による土作りを軸とした耕畜連携による地域農業の再生

## 有明堆肥利用組合（香川県）

### 堆肥による土作りを軸とした耕畜連携による地域農業の再生

カテゴリ 取り組み主体区分：[組織・グループ活動](#) 運営・経営形態：[畜種（畜産経営の場合）：肉用牛肥育](#)

タグ | [地域資源の有効活用](#) | [ネットワーク・絆](#)



有明地区野菜団地 中央に見えるのが堆肥生産の要である畜舎及び堆肥舎

有明堆肥利用組合は、堆肥による土づくりを通じて、地域単位で畜産と野菜農家が連携し、共存・共栄しながら地域農業の振興を図っている。昭和53年設立の同組合を核にして地域全体での農家規模の拡大・収益向上・後継者対策が図られ、現在では肥育牛220頭、野菜作付面積19haからなる生産団地を形成し、耕畜連携による地域農業の展開がされている。有明地区の特徴は、①温暖で雨の少ない沿岸地帯の気象条件と砂地を生かしたかん水施設、野菜施設を整備した野菜産地、②狭い耕地を有効利用するため集团的に施設野菜と露地野菜を組み合わせた集約的な農業展開、③農業後継者や農業者も多い地区で専業農家率が高いことである。同組合で畜産経営を行っている組合員は、野菜との複合経営を行っており、この経営が堆肥による土づくり技術を普及することで、改善点などが畜産耕種両面から提案され、実証を行うなど耕畜連携推進モデルといえる。



収穫終了後に行う堆肥散布



堆肥利用作物・露地栽培ネギ



堆肥利用作物・施設園芸・セロリ

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [新生養豚プロジェクト協議会](#) 「特定疾病フリー」で新しい産地を目指す「新生養豚プロジェクト協議会」の取り組み

## 新生養豚プロジェクト協議会（宮崎県）

### 「特定疾病フリー」で新しい産地を目指す「新生養豚プロジェクト協議会」の取り組み

カテゴリ | 取り組み主体区分：[組織・グループ活動](#) 運営・経営形態：[任意組織・協議会等](#) 畜種（畜産経営の場合）：[養豚](#)  
タグ | [口蹄疫](#) | [有事の際の対応](#)・[リスク管理](#) | [ネットワーク](#)・[絆](#)



口蹄疫の惨禍を忘れないよう川南町が建立した「畜魂慰霊碑」

口蹄疫による未曾有の被害を受けた西都・児湯地域では、大部分の豚（22万4,764頭）が殺処分され、無家畜の状態となり、オーエスキ病（AD）や豚繁殖・呼吸障害症候群（PRRS）のない清浄な地域となった。そこで今回の口蹄疫発生を教訓として、西都・児湯地域を1つの農場と考え「特定疾病フリー」の新しい養豚産地として再建する思いから、養豚後継者若手有志が率先して再建プロジェクト準備委員会を立ち上げ、検討会、生産者との意見交換会、再建に向けたアンケート調査などを実施し、皆が一致団結して取り組む「新生養豚プロジェクト協議会」を発足させた。さらに、経営再開の条件をクリアするため、新生養豚プロジェクトチーム（構成員：生産者、獣医師、県、町、家保の各代表）をスタートさせ、種豚導入基準、地域防疫組織の強化、農場環境対策などの自主ガイドライン検討に取り組んだ。一方では国、県、農畜産業振興機構、市町の助成事業などを活用しながら、口蹄疫終息から4ヵ月経った平成22年11月から経営再開の運びとなった。平成24年3月末現在、農家数で57%、頭数で60%が経営再開を果たしている。



口蹄疫の惨禍を忘れないよう川南町が建立した「畜魂慰霊碑」



協議会会長の長友克裕さん



口蹄疫発生後に新たに設置された消毒ゲート（宮崎県川南町(有)共同ファーム）



畜魂碑

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [合同会社](#) [北海道新エネルギー事業組合](#) [ミルクヒートポンプシステムによる省エネとコスト低減](#)

合同会社 北海道新エネルギー事業組合（北海道）

## ミルクヒートポンプシステムによる省エネとコスト低減

カテゴリ 取り組み主体区分：組織・グループ活動 運営・経営形態：合同会社

タグ | [再生可能エネルギーの利用](#) | [有事の際の対応・リスク管理](#) |



制御盤と貯湯タンク

本事業組合は、ミルクヒートポンプシステムの実証試験および販売に取り組むために、電気会社、設備会社などが運営している組織である。現在7戸の酪農経営で稼働。牛乳を水で冷やしバルククーラーに保管する過程で、搾った牛乳から熱交換器で熱を取り出して冷却と搾乳機械の洗浄等のお湯を作るシステムである。バルククーラーの電気料金が削減され、冷却用の水道水および洗浄用温水のための灯油が不要になる。なお電気料金が新たに発生するが、水道料金や灯油料金が不要になり、牛舎施設のランニングコストは大きく削減できる。本システムを100頭規模の酪農経営に導入した場合の経済性の試算では、年間59万9,000円の節減になる。導入額は約400万円で、この投資額は6～7年で回収できる。ミルクヒートポンプシステムは灯油と水道の使用量を大きく削減でき、インフラが被災した地域では効果的である。ただし、電気の使用量は増加することから、被災に備えた自家発電機の容量はその分大きめにしておく必要がある。



熱交換機



制御盤と貯湯タンク



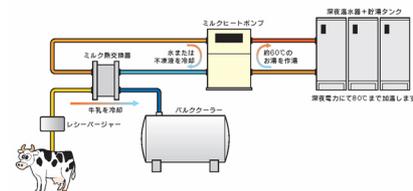
水蓄槽の内部



水耕栽培施設（複層エアームス）外観



栽培中のサラノバ



ミルクヒートポンプシステムの概要

## 取り組み主体区分：組織・グループ活動



北海道新エネルギー事業組合のHP (  
<http://hokkaido-newene.co.jp/>)

---

Copyright © JAPAN LIVESTOCK INDUSTRY ASSOCIATION (JLIA), All rights reserved.

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > [児湯養鶏農業協同組合](#) 鳥インフルエンザから復興し、鶏卵の安定供給を目指すための取り組み

児湯養鶏農業協同組合（宮崎県）

## 鳥インフルエンザから復興し、鶏卵の安定供給を目指すための取り組み

カテゴリ 取り組み主体区分：[組織・グループ活動](#) 運営・経営形態：[協同組合等](#) 畜種（畜産経営の場合）：[採卵鶏](#)

タグ | [鳥インフルエンザ](#) | [被災地での復興経過・プロセス等](#) |



児湯養鶏農業協同組合本所・鶏卵GPセンター

当農協は、飼料・資材の共同購入・供給、鶏卵事業（GPセンターで洗卵・選別し、まるひブランドとして販売）、育成事業（雛育成から販売）、肥料事業（鶏ふんペレット化堆肥の製造・販売）を行う養鶏専門農協である。平成23年1月に養鶏団地内で鳥インフルエンザが発生し、組合員の総飼養羽数の約半数である40万羽が殺処分となった。これまで、経営ごとに防疫意識に差が生じていたが、鳥インフルエンザ発生後、組合主導の下、ネット・網の張り替え、ネズミの徹底防除、ウインドウレス鶏舎への切り替え、着替え用専用室の整備等を行った。復興に当たっては、減少羽数分を補い、発生前の羽数を維持するために、農協出資による子会社を設立し、新鶏舎を建設、20万羽を飼養開始し、組合全体の飼養羽数100万羽を維持している。地域・組合・組合員の生き残りのための子会社農場運営は、今後の地域畜産の維持、担い手確保に参考となる事例である。



建設中の高床式鶏舎



販売している各種ブランド



本所の向かい側に設置している自動販売機

# 明日への道標

地域畜産災害再生支援事業

再生・復興の模範となる自立事例等を広く収集



[HOME](#) > 三河トコ豚極め隊 養豚生産者らが結集し、消費拡大活動を展開！ オリジナル加工品の商品開発にも取り組む

## 三河トコ豚極め隊（愛知県）

### 養豚生産者らが結集し、消費拡大活動を展開！ オリジナル加工品の商品開発にも取り組む

カテゴリ 取り組み主体区分：組織・グループ活動 運営・経営形態：任意組織・協議会等 畜種（畜産経営の場合）：養豚  
タグ | 地域畜産の存続を支える担い手対策 | 消費者等への理解醸成 | ネットワーク・絆



隊長の鈴木美仁さん

「有数の養豚生産地である愛知県東部の三河地区で生産された、安全でおいしい豚肉を食べてもらいたい」という思いの養豚生産者と関連事業者らが結集し、積極的な情報交換による経営力の向上と消費拡大にむけた活動を展開しているのが「三河トコ豚極め隊」である。平成22年4月に結成し、(1)消費者第一の肉づくりをトコトン極める、(2)地域に根ざした畜産をトコトン極める、(3)持続的な経営をトコトン極める、という3条から成る「三河トコ豚極め隊憲章」を制定。各種イベントに参加して試食・販売を通じて豚肉のPRを行う一方、メンバー全員で各養豚農家のそれぞれの豚肉を素材にしたオリジナル加工品の商品開発にも取り組んでいる。ともすればライバルにもなりかねない地域の仲間同士が、ともにおいしい豚肉づくりに切磋琢磨しながら、かつ情報交換し、さらに豚肉の消費拡大、情報発信を通じて地域社会の活性化を目指している。



国際養鶏養豚総合展2012の出展ブース



イベントで陳列された加工品の数々



今後は食育活動を重点的に行う